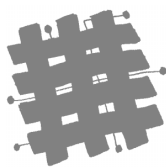


## 「オープンカレッジ」の教壇から

——「大学を開く試み」の実際——



酒井 敏

中京大学・文学部

はじめに

中京大学オープンカレッジは、平成九年度で開校以来丸三年を経過した。九年度秋期講座の時点で、開講講座（講義）数百三十、受講者（延べ数）二千二百八名、会員数（一度でも受講登録をした人の総計）六千八十七名を数える。オープンカレッジが開講されている八事キャンパスの四学部（商・経済・経営・文、やや離れて立地している法学部は除く）の学生定員は、約千三百名（平成十年度の募集定員）であるから、その盛況ぶりがわかる。私大の現状を

抜きにして単純に比較すれば、受講者数は一学年の学生総数の一・七倍であり、会員数は既に全学生数を超えていることになるのだから。

私は、開校以来、各期二コマずつ、このオープンカレッジの教壇に立ち続けてきた。より正確に言えば、開校に先立って平成六年の十月から十二月にかけて開講された準備講座（内部では「試行講座」と呼んでいた）にも出講したので、およそ三年半の経験ということになる。さらに、担当コマ数は一コマになるが、この四月からも出講の予定である。今回、幸いに機会を与えられたので、ささやかなが

ら私の実践経験を整理し、来期講義への自戒とするとともに、今後の展望や問題点にも触れてみたい。「大学を開く」試みの実践報告として、なにかしきでも参考に供するものがあれば幸いである。

### 私の開講課目

まず、この三年半の間に私が開講してきた課目を、各期講座ごとに掲げてみよう。括弧内は曜日と時間帯、回数である。



さかい・さとし●一九五九年、千葉県生まれ●森鷗外を中心として、明治・大正期の小説を研究テーマとする。最近の課題は「森鷗外と日清戦争」。昨年、「森鷗外と日清戦争―「連続」と断絶」、あるいは「傍観機関論争」の再検討（講座森鷗外1 鷗外の人と周辺）、「日清戦争と森鷗外―『徂征日記』を中心に」（『日清戦争と東アジア世界の変容』下巻）『キタ・セクスアリス』をめぐって―その周辺、および眼差しと「制度」へ差別の問題―（『森鷗外』「スバル」の時代）の三論文を公刊。他に論文多数。●大学の授業（大学の授業をする、ということ）、特にその方法に興味があります。今回の拙文は、具体的に心がけているうちに膨大な量となり、所定の枚数に縮めるため削ってゆく過程で、結果として具体性のないものを書いてしまったのでは、と危惧しています。誌面において、さらに議論が着詰められることを望みます。いろいろご指示・ご批判いただけましたら幸いです。

### 試行講座

漱石と鷗外―二天文豪を読む―

（火曜・夜・七回／水曜・午前・七回）

### 七年春期

近代名作探検―日本近代の名作講読―

（火曜・午後・十一回）

漱石と鷗外―二天文豪を読む―

（火曜・午後・十一回）

### 七年秋期

目で見える近代文学

―映像による作家・作品入門―

（火曜・午後・十一回）

近代名作探検―日本近代の名作講読―

（火曜・夜・十一回）

### 八年春期

大衆文学の魅力

―徳富蘆花『不如帰』と  
江戸川乱歩の諸作品を通して―

（火曜・夜・十一回）

目で見える近代文学(2)

―映像による作家・作品入門

鏡花と潤一郎―

（木曜・午後・十一回）

### 八年秋期

俠氣と幻想―作家と作品入門 泉鏡花―

（火曜・夜・十一回）

「芥川龍之介」を読む

—晩年の作品を中心に—

(木曜・午後・十一回)

## 九年春期

耽美と越境—作家と作品入門 谷崎潤一郎—

(火曜・夜・十一回)

文庫本の中の間学

—名作の中の間関係でたどる近代文学史—

(木曜・午後・十一回)

## 九年秋期

文庫本の中の間学

—名作の中の間関係でたどる近代文学史—

(火曜・夜・十一回)

近代名作探検(2)—この道はいつか来た道—

(木曜・午後・十一回)

「春期」とは、ほぼ大学暦の前期と重なる春期講座を指し、「秋期」とは、同じくほぼ後期と重なる秋期講座を指す。それぞれ独立しており、十二回の講義が可能だが、講義回数は担当教員の都合で加減できる。私の場合、それぞれ出張(春期には教育実習視察指導、秋期には学会)のため、当初から一回ずつの休講を予定し、各期十一回としてきた。

試験は実施せず、三分の二以上の出席があれば合格。講義回数十一回の講義であれば、二・二単位(講義一回につき〇

二単位。学部での単位とは違う独自のもの)が認定される。なお、大学の休暇期間中にも、夏期と冬期の特別講座が開講されるが、私にはそれを担当した経験はない(一度だけ、文学散歩を核にした課目を開講してみても、との打診を受けたことがある)。

英会話の実地研修なども含まれる特別講座を除くと、開講時間帯は、午前(十時四十分～十二時十分、大学の二時限に相当)・午後(一時～二時三十分・二時四十分～四時十分、同じく三時限・四時限に相当)・夜(六時三十分～八時)の三つ、一日四コマである。平成七年度春期講座では、三・四時限の二コマで開講した。開講時間帯で「午後」が重なっているのは、そのためである。

各期ごとに「総合案内」という冊子が作られ、講義名や開講時間とともに、講義内容も掲載される。講義内容は、当初四百字程度だったが、現在では倍の字数になり、シラバスに近いものを求められるようになった。受講希望者は、この「総合案内」を参照して課目を選び、受講を申し込む。決定は先着順による(電話可)。私のような一般の講義の場合、二十名～二十五名が定員で、定員に達した課目から(申し込み期間中であつても)締め切りとなる。

課目名を一覧していただくと、二コマの内一コマを新し

い題材とし、もう一コマはその直前の講座と同じ内容、という尻取りのような開講パターンになっていることや、「入門」を唱っている課目が多いことなど、すぐに幾つかの特徴が目につくと思う。そうした点にも既に、課目決定や授業運営の工夫が反映しているのだが、以下、講義内容にも触れながら、そのあたりの事情をもう少し具体的に述べてみたい。

### 尻取り型開講パターンの理由

まず、オープンカレッジを担当して実感させられたことは、受講生は教員に着く、ということである。先に講座(講義)数百三十と書いたが、平成九年度秋期の「文学」講座では、「日本書紀の世界」「万葉集」「源氏物語」「文庫本の中の人間学」「近代名作探検(2)」「秋の夜長の外国文学」の六つの講義が開講された。「文学」全般、それに関わる講義なら何でも受講したい、という受講生には、確かに多様な講義が準備されていると言えよう。しかし、この中で、日本近・現代文学を対象としているのは、私の二つの講義だけだ。その分野の講義を受講したい、という受講生は、私の講義を受講するしかないのである。興味・関心が具体的であればあるほど、選択の幅が狭くなってしまふ。

かくて、私は毎回(試行講座からずっとという方も含めて)、同じような受講生を相手に講義することになる。

受講生のニーズが分からず、講義内容の決定に苦しんだ試行講座に比べれば、こうした状況は確かに講義し易い。テーマの希望や要求されるレベルが簡単に把握できるし、気心も知れてくるからである。しかし、同じ内容の講義は二度とできない。私の手持ちの材料には、当然ながら、限りがある。現在までのところ、毎回テーマを変えて開講できているが、正直、そろそろ負担になってきた。

それでは、尻取りのような開講パターンは、少しでもその負担を軽くするためだけに採用しているのかと言うと、そうでもない。オープンカレッジは地域性が強く、口コミの影響が大きいのである。時間帯を変えて同じ講義を開講することで、以前の受講生に面白いと聞いて、という動機での受講生を吸引できるわけだ。だから、ここには事務局(総合企画部エクステンション事務室)の意向も反映している。

ちなみに、講義内容について事務局から注文が付くことはほとんどない。私の場合で言うと、試行講座の際に、夏目漱石をテーマにして欲しい、と依頼されたのが唯一である。試行講座では、「文学」を担当したのが私だけだったから、動員力を調査するために最も人気のありそうなテー

マをねらったのであろう。なお、私が毎回のように「夜」に開講しているのは、事務局の希望による。この時間帯の「文学」は、(日本文学では)いまだに私しか開講していない。

### 「入門」はどうして多いか

オープンカレッジ受講生の受講態度は、一般の学部学生に比べてはるかに熱心である。限られた時間の中で、わざわざ受講しようとしているのだから最初から意欲はあるわけで、これは当然とも言えよう。例えば、教員免許などを取得する目的で編入してくる学生同様、目的意識が明確で、教育のスタートとしての動機付けは必要がない。従って、「聞かせる」努力をする必要もなく、その意味で、講義運営は非常に楽である。しかし、この向学心に甘えてはいけないと思う。同時に、講義する側は重い十字架を背負わされているはずだ。

あるカリキュラムに従って所定の単位数を取得し、学士号や諸資格(免許)を得て卒業する、という学部の教育システムに比べると、オープンカレッジでの受講は単発であると言える。それだけ、オープンカレッジでの講義には「商品」としての性格が強い。相互に関連を持つ学部の講義を、

一コマいくらと算定するのは難しいが、オープンカレッジの受講料は、そのまま何回かの講義の「価格」になるのである。講義回数と受講料を比較すれば、一コマの単価はすぐに算定されてしまう。もちろん、大学の諸施設を利用してきるといふ付加価値はあるが、そもそも限られた時間の中で受講している以上、その価値は(例えば学部学生と比べて)非常に小さい。施設利用などの付加価値は、ほとんど「商品」にはならないのである。

この緊張感も、そのまま受講態度に反映しているように思う。ここに、私達講義する側には、「価格」に見合った「商品」を提供する義務が生じる。こう書いてしまうと殺伐とした印象を与えるかも知れない。しかし、この厳しさを意識することは、私にとってプラスであった。

まず、どのように講義することが最も親切か、常に考えるようになる。具体的に言えば、できるだけ一回一回の講義が完結していることが望ましい。前回の講義を受けていないと今回の講義がわからない、という積み上げ式のスタイルは避けるべきである。時間の制約が厳しい受講生のことを思えば、自ずからそうなるだろう。各期講座の講義がテーマに従って一貫していなければならないのは当然として、そのまともは途中一、二回抜けても、把握できるよ

うに全体の計画を立てることが必要になる。これは、受講生の熱意に応える形で考えさせられたことだが、学部での自身の講義に対する反省にもなった。

次に、説明の精粗や内容の難易を、開講してからある程度柔軟に変更できるような工夫が必要になる。学部での講義の場合、将来を考えてここまででは、という選択も必要であるが、オープンカレッジの場合、受講生が現在持っている知識をいたわらねばならない。ちよつと特殊な言い回しを使った（オープンカレッジで講義するようになってから私はこの言い回しをよく使う）。受講生が現に持っている向学心や興味の持ち方を大切にし、いたずらに研究上の新説や斬新な方法を用いない、というほどの意味である。講義する側が、あるレベルを求めるのではなく、受講生の興味・関心によって講義のレベルが動く、と言つてもよい。受講資格に制限はないから、受講生は多様であり、知識量も興味・関心の持ち方もバラバラである。できる限り「最大多数の最大幸福」を目指すすれば——言い換えれば、できるだけ多くの受講生に「価格」に見合った満足できる「商品」を提供するためには——受講生一人一人の反応に注意して、講義内容を加減しなければならぬ。そのためには、ここに書いたような工夫が必要になる。

しかし、口で言う程、簡単ではない。こうした柔軟な対応のためには、ある目標に到達させる、という方針で講義する場合より、綿密な準備が必要である。目的意識が高く、厳しい時間的制約の中での受講だから、こちらの話す内容にアラが見えると、見限るのも早い。オープンカレッジを担当して感じる厳しさは、こういう点にもある。

いささか言い訳めくが、「く入門」という言い方は、こうした諸条件の下で講義するには便利なものだ。一方で、なんとなく敷居が高い、という受講希望者にも親しみやすいのではないか、とも思う。映像（映画）を使った講義を何回か試みたのも、ここに述べたのと同じ発想からである。

#### 映像（映画）を用いた講義 その試み

私は、平成七年秋期講座の「目で見る近代文学」を始めとして、四講座にわたり映像（映画）を用いた講義を展開した。映像を利用した授業への取り組みは、今日、いろいろな大学でかなり一般的に行われているようだ。しかし、私としては、教員経験の全てを通じて初めての試みであった。そして、このスタイルは、オープンカレッジでの経験からフィードバックして、現在、学部の一年生を対象とする講義に生かされている。

「漱石と鷗外」「近代名作探検」と、もっぱら講義形態の授業を続けて、受講生が固定してきているのに気が付いた。一方、ここまでの経験で、多くの受講生のニーズが、文学に触れること、ないしは読書の手掛かりを求めることであることも見えてきていた。そこで、より多くの人々に親しみやすい講義を開講して、受講生を流動化させようとしたのが、まず第一の理由である。言い添えておけば、私のこの提案には事務局も積極的に賛成だった。

次に、やや読みにくい作品でも映像と比較して鑑賞することで講義に採り上げられるだろう、と考えたこともその理由である。「近代名作探検」では四作品を扱ったが、最後に採り上げた谷崎潤一郎の『春琴抄』について、独特な文体が読みにくい、との感想があり、確かに講義に対する反応も鈍かった。『春琴抄』には三コマを充てたが、このレベルを基準にすると、例えば泉鏡花の作品などは扱えないことになってしまう。受講生が固定してきている状況で、講義のテーマが次々に限定されてしまえば、先細りになるのは明らかだ。そこで、映像で作品読解の手助けをすることを考えたのである。

最後に、この年の春期講座に二コマ連続で開講し、時間のやりくりがきつかったため、映像を使うことでいささか

でも肉体的な負担が軽減できるのでは、との期待があったのも事実である。しかし、これは全く逆であった。

#### 映像（映画）を用いた講義 その反省

こうして開講した「目で見る近代文学」は、人気のある講義として迎えられた。しかし、十一回の講義を通しての成果となると、反省も多い。

まず、焦点が絞れなかった。準備している内に、私の方が映像論や映画論にのめり込み、対象を広げ過ぎたのである。白黒の無声映画『瀧の白糸』からアニメの『銀河鉄道之夜』まで、原作についての講義一コマと映画鑑賞一コマの組み合わせで、五作品を採り上げたのだから、無理もない。各講座の講義を一連のまとまりあるものとする、という原則を自分で崩してしまう恰好になった。この反省は、以後の映画を用いた講義の組み立て方に生かされることになる。次第に対象を絞り込んでいった（鏡花と潤一郎）↓「俠気と幻想・鏡花」↓「耽美と越境・潤一郎」のは、その結果であった。

次に、準備に時間がかかり過ぎる。文章なら斜め読みもできるが、映画は早送りしながら見るわけにはゆかない。予習にひどく時間を取られ、肉体的には楽になるところか

睡眠不足の連続になった。さらに、映画を鑑賞するたびに原作と比較したレポート(長さ自由)を提出する、というスタイルで進めたため、それを読む負担も加わった。しかし、そのレポートを読んだことで、私の目論見の一つ、映像が読解を手助けするのではないか、との予測がほぼ当たっていることを確認でき、一つの収穫になったと思う。

最後に、受講生のニーズに対する私の錯覚がある。私が期待したほど、このスタイルは受講生に受け入れられなかった。「目で見る近代文学」の講義運営上の欠点を意識して、焦点を絞った講義を展開してみても、毎回のようには先生のお話をもっと聞きたい、との反応が必ず現れたのである。教員が話す、という一般的な講義形態への受講生のこだわり(愛着)が、私の予想よりはるかに強かったのだ。この反応には、受講生の年齢層が比較的高かったことも関係していると思う。ここでの私の試みと、受講生の多くが「大学」の講義について抱くイメージとは、大きな隔たりのあったのである。オープンカレッジが、他ならぬ「大学」によって主催されていることの意味を、その盛況の理由とともに改めて考えさせられる経験だった。この経験から私は、現状において、「大学を開く試み」は、「大学」が閉ざされていたことによって形作られた懂れに、かなり

多くの部分で支えられていると思う。だから、そこで行われている「試み」それ自体の当否(例えば私個人で言えば、生涯教育の一貫としての私の講義の有効性)など、おそらくまだ問題にできる段階ではないのだ。

### 受講生との交流

「目で見る近代文学」で、森鷗外の『雁』や泉鏡花の『婦系図』を鑑賞したとき、学部生たちとは全く違う受講生の反応に気付いた。『雁』のお玉や『婦系図』のお蔦のような、虐げられた女性に対する感情移入が非常に強い。多くは主婦層の受講生であるが、時に泣きながら鑑賞しているのである。映像のインパクトの強さ(文学作品の鑑賞・読解ではここまでの強いリアクションはなかった)を思う一方で、年齢層の広い講義の難しさを実感した。講義する私が知識として持っていることと、それに近い状況を実際に体験した世代との相違であり、講義を準備する段階でそこまでは予想できない。私にはいい勉強になったが、こうした経験をやる中で、できるだけ受講生の方々と交流しようと思うようになった。講義後、お茶に誘われたりしても断り続けていた私が、時間に余裕のある夜の講義の後など、コップを企画したりするようになったのである。



私は大学の近くに住んでいるため、休日などスパーで買い物している時に受講生から挨拶されたりすることがあった。それだけに、公私の使い分けには慎重であろうと心掛けていたのだが、講義以外の場で雰囲気作りをしようと考えたのには、前述のこと以外にも一つ理由がある。午前や午後の時間帯に比べると、夜の時間帯の受講生は数が少ない。資格取得など、日常生活に直接影響する科目とは違う、「文学」という課目の性格もあろう。さらに、時間の制約が厳しい(多くは勤め帰り)ため、継続受講が困難になり、一度欠席するとそのままになる場合も多かった。しかし、「文学」は本来、大人数相手に講義できるものではない。できれば、お互い議論しながら進める方が有効なのである。大人同士の遠慮した会話ではなく、講義の場では文字通り学生気分で見聞のない議論をして欲しい。受講生の年齢層の広さ(二十歳そこそこから七十歳以上まで)も、私が実感したように、お互いのプラスになるはずである。そう考えた。

実際には、皆が私に話しかける恰好になる場合が多く、完全に期待通りには運んでいない。しかし、継続受講の力にはなっているようだし、同人雑誌を交換したり演劇のチケットを配ったりと、相互交流の実も上がっているようにで

ある。もちろん、私の得るものも大きい。ただ、会議の都合で、午後の時間帯の受講生とはこうした時間が作れず、申し訳ない思いをしている。差別待遇だと受け取られないように、配慮しているところだ。

一試行講座のときのことだが、何しろ初めての試みというわけか、実にいろいろなニーズの受講生の相手をした。大学近隣の商店会の会長さん。どれくらいの人が集まるのか、に最も関心があったのだろう。しかし、この方は、その後も本学国文学会の公開講演会などに顔を見せて下さる。それから、お子さんを本学に通わせているというお父さん。後で事務局から聞いた話では、大学でどんな授業をしているのか心配で確認にいらしたのだそうだが、幸い安心していただけたらしい。先に、オープンカレッジの講義は「商品」としての性格が強い、と書いた。しかし、そこで「品質」を確かめられているのは、それだけではない。その窓を通して、オープンカレッジを主催している大学の全てが価値判断の対象とされ、それをこそニーズとする受講生も存在するのである。

### 学部講義へのフィードバック

当初、オープンカレッジで講義することが、学部での講

義にこんなにも影響を与えるとは思ってもみなかった。それぞれの教育目標は別であり、当然、講義の題材も運営のノウハウも隔たったものになると考えていたからである。しかし、既にいくつか触れたように、実際には大きく関わりが合うことになった。

まず、自分が講義するというところに、非常に自覚的になつた。運営上の配慮については前に書いたが、もっと形式的なことでもそれがある。例えば、一コマの講義時間。十五分遅れて始め十五分早く終わる講義が学生に一番人気がある、とよく言われる。しかし、こんなことは、オープンカレッジでは論外だ。「商品」としての性格の強い、言い換えれば、九十分の講義何回でいくら、と契約している講義で、実質六十分しか話さないとすれば詐欺である。そして、そうした詐欺を許さない緊張感と執意が、オープンカレッジの受講生にはある。短い講義が喜ばれるという俗信も、実は教員の甘えなのではないか。短いことを学生が不満に思うような講義を展開するようにこそ、心掛けるべきであろう。私がここに書いたことは、当たり前過ぎるほど当たり前のことかも知れない。しかし、私の乏しい経験の中で、腹の底からそれを実感させられたのは、オープンカレッジでの講義が最初であった。具体的に私の講義がどう変わ

つたか、の評価は学部学生達に委ねるしかないが、少なくとも、私自身の言わば「覚悟」ははつきり変わっている。

「目で見える近代文学」の実践経験は、先にも少し触れたように、平成九年度から、学部の基礎教育科目「日本文学の基礎」に生かされた。ガイダンスその他を除き正味二十四回の講義で、四作家五作品を採り上げ、百名近い履修者がほとんど脱落することなく、試験答案を見るかぎり、ほぼ所期の目標を達成できたと思う。鑑賞する映画を絞り、丁寧な説明ができるように配慮したこと、映像表現と言語表現の本質的な違いに気付く、という達成目標を最初から明確にしたことが、この結果につながったようだ。前期より後期の方が答案の質も高まり、何人かの学生は、まとまった読書の習慣を確実に身に付けた。映像世代の、しかも最初から文学部を第一志望としているとは限らない者もいる、現在の学生達に対して、動機付けの意味も含めた基礎教育の方法として、有効だったと言えよう。これなどは、オープンカレッジでの経験が、具体的な形で学部教育にフィードバックできた例である。

「大学を開く試み」とは違った意味で、大学教育が大衆化している今日、学部での講義がカバーしなければならぬ領域は非常に広がった。簡単に言えば、一般的な社会

生活の常識から研究者を目指す際に必要になる専門知識まで、ということになる。次々と大学院が開設され、例えば教員免許の取得一つとっても、大学院を含めて考えなければならぬ状況がある一方で、講義中に無駄話をしてはいけないとか、教室に入ったら帽子を脱げとかというレベルの注意までも与えなければならぬ。そんな現状と比較すると、あらかじめ強い学習意欲を持っている受講生を相手にできるオープンカレッジでの講義は、逆に楽だとも言える。しかし、その両方で期待されているのが、「聞きたいい（聞きたくなる）」講義であることは間違いあるまい。もちろん、要求の質には違いがある。両方の現場での実践経験を持つ者として、それぞれの経験を有効に共鳴させながら、そんな講義を組み立てる工夫を今後も続けてゆかねばなるまい。

### 問題点と今後への展望

冒頭にも書いたように、現在まで中京大学オープンカレッジは盛況の内に運営されている。また、そこでの講義を担当した経験も、私個人としてはプラスになっていると思う。しかし、今後のことを考えると、そう楽観的ではいられまい。

講義を担当する教員について考えると、まず、負担増という問題がある。先に挙げた要項の執筆や日程調整、特に春期講座に向けてのそれが、年末・年度末の繁忙期と重なってしまう。さらに、できるだけ動員力の大きい講義を開講したいという事務局側の思惑があるから、希望する全ての教員が、平等に順番で担当するわけにはゆかない。非常勤として他大学に出講するより、自分の所属する大学のオープンカレッジへの出講を希望したとしても、専門領域によっては不可能である。ことが負担だけなら、それでも済むが、ペイの問題がからむ。ここに、教員の差別化という問題が生まれる。生涯教育に積極的に取り組むことが、教員の収入に差をつけることにつながり、より極端な場合には、採用人事の際に専門領域による選別が行われるかも知れない。順調に回転している間は表面化しないだろうが、基本的に二重組織として運営されている以上、こうした問題が噴出する可能性は常に潜んでいる。

組織体としてのオープンカレッジを考える場合には、この二重組織の問題が大きい。各教授会から「エクステンション管理委員」が選任されているが、実務は事務局だけが担当しているようだ。教員の負担を増やさないためには、確かにこうした形でしか運営できない。しかし、中京大学

と中京大学オープンカレッジとの関係について、全学的に真のコンセンサスがあるか疑問である。同様に、受講生がそこにどのような意識を持っているのか、本当のところは見えていない。

オープンカレッジがスタートした頃、既にカルチャーセンターブームの頭打ちが言われていた。それも、試行講座が必要とされた理由の一つには違ひなからう。そして、生涯教育事業としては後発に属するその試みが成功した背景に、「大学」への憧憬があるだろうことは先に指摘した。

しかし、そこでの講義が「大学の講義」そのままではないことは言うまでもないし、オープンカレッジが、「大学」の建学の精神に相当するような、ある一つの理念に基づいて運営されているわけでもない。つまり、極論すれば、今のところオープンカレッジにおける「大学を開く試み」の実質とは、「大学」の名前を背負ったカルチャーセンターなのだ。とすれば、今のままで「大学を開く試み」を続けることは、その試み自体によって試みの価値を減殺していることに他ならない。自分の足を食うタコのようなもので、このままでは維持できないことにならう。

これらから、今後進むべき道が見えてくる。組織体としての実質を造り、母胎となっている大学の教育理念——例

えば建学の精神など——に影響されながら、個性を持った教育理念ないし目標と、それに見合ったカリキュラムを提示すること、がまず必要とならう。次の段階として、前述のようなカリキュラムを基に、ある達成感が得られる履修モデルなどを提示し、場合によっては科目等履修生の制度を活用して、学部講義と相互乗り入れをする。資格や単位認定のレベルにおいても、「大学を開く」方向へ動く。継続受講の動機付けとしても、これは有効なはずだ。組織体としての実質を作るためには、オープンカレッジに専任教員を置くことを考える必要もあるう。こうした充実の上においてこそ、生涯教育の一環としての「大学を開く試み」、オープンカレッジは、真に興味あるものとなるはずである。私はオープンカレッジの教壇に立って、貴重な体験ができた。しかし、その一方で、まだまだ「バブル」だと感じたことも事実である。そこで講義することが、大学教員のサービスだなどと考える意識は捨てなければならぬし、おそらくその教壇に立った人間は、そうした考えを捨てさせられる。そして、おそらくそれは「大学」そのものの活性化につながるはずだ。そのためにも、近い将来、ここに書いたようなレベルでの競争が生まれることを期待したい。